湛海書状（近畿大学中央図書館蔵）

二〇二二年度演習ＩＡ受講生・新　谷　和　之

本史料は、二〇二一年度に近畿大学中央図書館蔵が購入したものである。二〇二二年度の演習ＩＡ（３年生のゼミナール）にて受講生とともに内容の検討を行った。受講生は以下の一二名である。

河野凌大・森寛大・山田雄陸・行廣遼・後藤颯斗・貝野大和・山田悠太・藤田智海・山口創平・佃涼羽・水口達貴・白川巧人

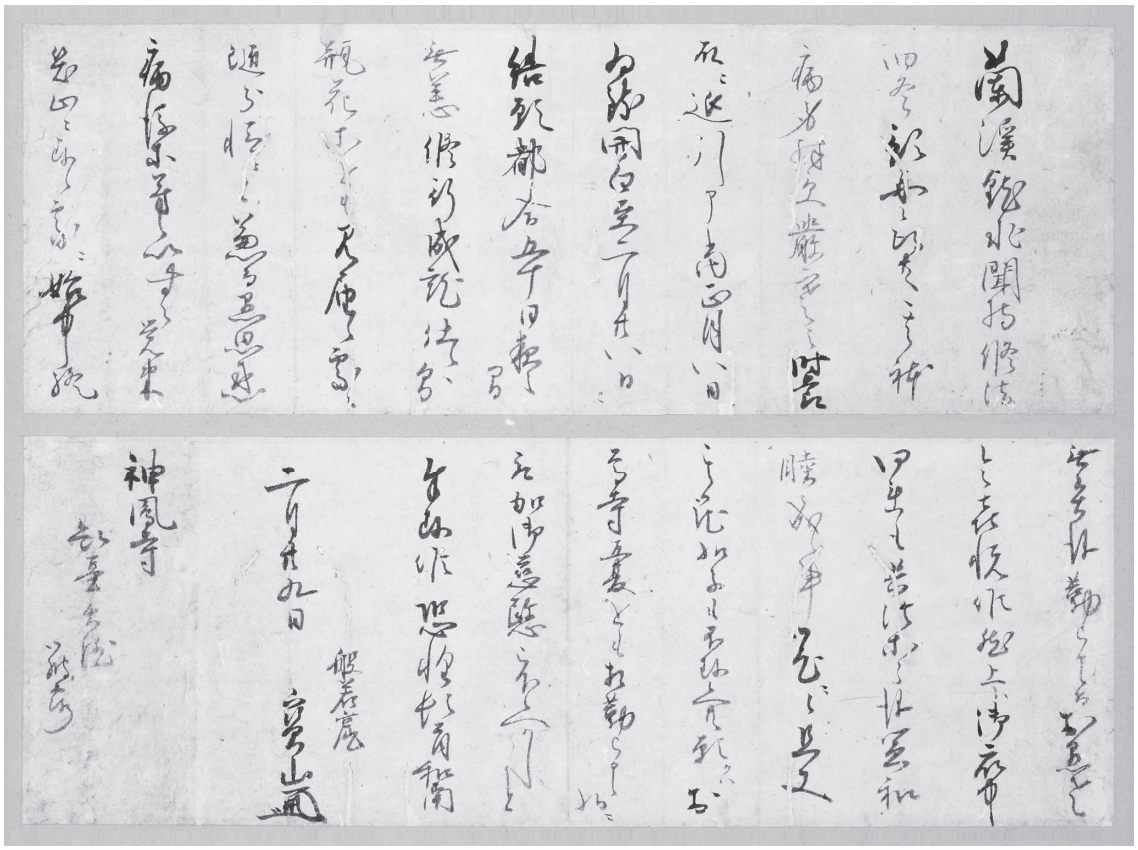
差出の般若窟宝山は、江戸時代中期に真言律僧として活躍した湛海のことである。湛海は、寛永六年（一六二九）に伊勢国安濃郡一色村（津市）に生まれた。同村の大神宮寺に入寺した後、江戸深川の永代寺で密教を学び、承応二年（一六五三）から翌三年にかけて高野山で修行している。その後、永代寺の興隆に力を尽くすが、寛文三年（一六六三）には上洛して粟田口の天王坊に住み、歓喜院を創建した。延宝六年（一六七九）に大和風の森の南禅寺に来住し、修験の聖地として知られていた生駒山般若窟に登る（佐藤任『湛海和尚と生駒宝山寺』東邦出版、一九八八年）。地元の百姓らの支援を受けてその地に大聖無動寺を開き、元禄五年（一六九二）に宝山寺と寺号を改めた（小林剛編『宝山湛海伝記史料集成』開祖湛海和尚第二百五十遠忌事務局、一九六四年、一二七号）。享保元年（一七一六）、当寺にて八八年の生涯を閉じた。

宛所の神鳳寺は、大鳥神社（堺市）の神宮寺であったが、明治期の廃仏毀釈により失われ、寺宝などは末寺の光明院（堺市）へ移された。戦国期の兵乱により荒廃していたが、寛文七年に入寺した快円により復興を遂げる。快円は寛文一二年、師の円忍を当寺に招き、自らは摂津住吉の地蔵院に退いた。延宝五年に円忍が亡くなると、快円は再び神鳳寺を継ぐ。延宝八年には、神鳳寺は真言律宗南方一派の本寺として幕府の勅許を得ている（『堺市史　続編１』堺市、一九七一年）。

神鳳寺の中興に力を尽くした円忍は、寛文四年に歓喜院に来住しており、湛海と親交があった。湛海は延宝二年に神鳳寺に入って円忍のもとで律を学び、延宝四年に円忍より具足戒（比丘・比丘尼が保つべき戒）を受けた（佐藤前掲書）。このように、神鳳寺は湛海の宗教活動において重要な存在であった。

本史料では、蘭渓より求聞持修法について旧冬にお示しいただいたが、病身であり、厳寒の折でもあったため延引したとある。求聞持修法とは、虚空蔵求聞持法に説く修法で、見聞したことを記憶して忘れないようにするものである（『日本国語大辞典』）。正月八日から二月二八日までの五〇日間、無事に修行を遂げたことを伝えている。神鳳寺の衆中が兵法などについて和睦したことを喜び、神鳳寺において五夏を勤められるよう配慮してほしいと述べている。五夏は、一夏九旬の安居（修行）を五回勤めることをいう。五夏を勤めた僧は、阿闍梨として弟子を指導し、軌範となることができた（『例文仏教語大辞典』）。実際に神鳳寺では、寺僧の階層をあらわす表現として「五夏以上（以下）」が史料にみえる（「光明寺文書」一三『堺市史　続編４』など）。

般若窟の名乗りから、湛海が生駒に移った延宝六年以降に発給されたとみられる。この時、円忍は既に亡くなっている。円忍の死後も、湛海が神鳳寺と宗教的な交流を続けていたことが本史料からうかがえよう。



湛海書状（縦三二・八cm、横四四・九cm）

蘭渓就求聞持修法
旧冬預示候得共、其躰
病身殊更厳寒之時節
故ニ延引申、当正月八日
為致開白至二月廿八日
結願、都合五十日夜之間
無恙修行成就仕候間、
瓶花等をも見届候処、
随分情ニ候、兼而愚思述
病後等尋候、以無覚束
笑止ニ存候処ニ、始中終
無異儀勤被申候間、於愚意
令喜悦候、然上ハ御衆中
何れも兵法等之儀宜和
睦被成候事尤ニ候、且又
其地様子も不存候へ共、願クハ於
尊寺五夏をも相勤被申候様ニ
被加御慈愍被下候へかしと
奉存候、恐惶頓首和南、
般若窟
二月廿九日　宝山（花押）
神鳳寺
知事大院
御披露